

OJT報告会は「伝える力」「聞く力」を育てる授業

現場での気づき & 学びを自分の言葉で紹介、意見交流

カレッジ通信

編集・発行

東京建築カレッジ

授業見学
大歓迎!

Tel. 03
(5950)
1771

2年間のカレッジ生活で、1回以上、全体会でOJT報告を経験します。



東京建築カレッジは、コミュニケーション能力の育成(言語教育)にも力を入れています。コミュニケーション能力は、「読み書き」(書き言葉)と「話す・聞く」(話し言葉)の2つに分けられます。授業日に必ず提出する「日報」や各種の「レポート」提出、毎月の「出勤状況簿&OJT(現場実習)月報」は「書き言葉」の訓練、年3回のOJT報告会や卒業制作発表会は「話し言葉」の訓練です。

7月27日の2024年度第1回OJT報告会では、2年生(第28期生)5人、1年生(第29期生)4人が全体会でOJT報告。その後、司会や記録係、報告係を分担して3つの分散会がおこなわれ、お互いの本音を交流しました。

全体会では、自分の仕事内容や現場で学んだこと、悩みなどを大勢の前でスピーチしてもらいます。

小塩秀斗さん(2年生、大工、II上写真)は、「カレッジで使い方を学んだ手道具はリフォーム現場で役立っている」と話していました。一方、取引先から頼まれた「ゴミ屋敷」の清掃で苦労した経験を紹介しました。古民家の再生に親方と一緒に取り組んでいる人もいます。当麻雄大さん(2年生、大工)です。



テーマに沿って話し合う分散会の様子

「怒られると嫌な思いになるけど、自分が気づかない問題点を他人が指摘してくれているということ。大事なこと気づいたね」(金田正夫講師)というコメントが出されました。

分散会では、全員が自己紹介した後、仕事での苦労や職場で困って

いることを出し合いました。雨漏りの検査や対策の体験など各自の実務紹介の一方、「5月は休日がなかった」、「仕事で使う物品の個人立て替え購入が当たり前の慣習がおかしい」など、過酷な職場環境を告発する声もありました。こうした指摘を真剣に受け止め、本校母体の東京土建と一緒に、改善の取り組みを進めたいと考えます。◆

カレッジで学んだことが生かせる手刻みばかりの現場仕事をアピールしました。親方の「無垢の木が時間と共に変化することを予想しながら仕事するのが楽しい」という言葉が印象に残ったそうです。

田邊琢磨さん(1年生、大工)は、4月からの経験を豊富な写真で丁寧に報告しました。社会人1年生の戸惑いを素直に表しながら「怒られることは幸せなことなんだ」と自分の気づきを話してくれました。この言葉について立ち合いの先生か

事業所と先生が合同研修会

東京建築カレッジは7月21日、池袋校舎で「研修生派遣事業所と講師・指導員の合同研修会」を開きました=写真。大工不足の悲惨な実態と打開の方向性を伝える7月2日初回放送のNHK「クローズアップ現代」を視聴学習した後で、



2年間のカリキュラムの流れを、施工系、計画系、構造系、情報系、教養系の授業ジャンルごとに先生方のリリーススピーチで学びました。参加者の一人は「カレッジ教育にもっと前のめりで参加していこうと思った」と話していました。

1年生の授業から



各自の継手の強度を確認

「建築材料実験」
8月1日から「建築法規Ⅰ」が始まりました。法規は構造力学と並んで苦手とする人が多い科目ですが、鈴木陽子講師の明るく丁寧な法規の解説で楽しく学んでいます(右写真)。

では、実験結果の正確なレポート提出が義務づけられます。「レポートは用紙の汚れの有無、漢字が書けているか、から指導します。他人に見せる報告書ですから当然です」と高橋俊幸講師。

「建築法規Ⅰ」始まる

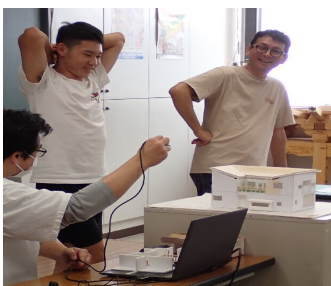


「初学者でもわかりやすい」「建築士試験対策の助言も豊富」と好評な鈴木陽子講師

2年生の授業から

東京建築カレッジには住宅設計の授業が1年次・2年次の複数の科目横断型で設けられています。そのしめくりの授業が8月1日に行われました。

件で各自が自由設計したプランを50分の1の模型で発表します。「この学校の研修生の多くは大工などの施工従事者だけれども、デザインや設計の仕事とはどういうものか、経験させたくて、この授業を考案した」と長野智雄講師。発表は、デザインや設計の前提となる家族構成やライフスタイルの説



明からおこないます。自分たちが最終的には誰のために仕事をしているのか、気付けさせる狙いもあります。

設計プランを模型で発表

7月28日、夏の自主ゼミ「溝口明則先生(建築史担当講師)と行く『感覚する構造・法隆寺から宇宙まで』展」をおこないました。2年生4人、1年生1人、来期入学予定者など約10人が天王洲アイル駅近くの「WHAT MUSEUM」(寺田

倉庫)に出かけました。構造の観点から建築の発展を辿る展覧会で、木造古建築が素材の使い方や接合部の工夫でどのような進化を遂げてきたのか、溝口先生のわかりやすいコメントを聞きながら学ぶことができました。



ひと

「建築環境Ⅰ」担当講師
パク チャンピル
朴 賛弼 さん



東京建築カレッジは座学の内容、講師陣も充実しています。「建築環境Ⅰ」担当の朴賛弼講師はソウル生まれで国費留学生として来日。法政大学建築学科博士課程修了、工学博士。

法政大学デザイン工学部建築学科で長年、教員を務め(昨年3月定年退職)、日本民俗建築学会に所属し日本と韓国の民家研究で有名な先生です。

環境問題やまちづくりにも関わり、『清溪川再生 ソウルの挑戦—歴史と環境への復活』(鹿島出版会)では、都心部の高速道路を撤去し景観を取り戻したソウルの事例を紹介しています。建築環境や設備の教科書も多数執筆し、建築士試験のこの分野の出題傾向なども授業の中で解説しています。(下の表紙写真は最近の著作)

